

## 斎藤信治と産業工芸振興政策 ― 国立工芸指導所での活動を中心に ―

河野克彦

はじめに

昭和三年（一九二八）、商工省の一機関として仙台に工芸指導所が設置された。その設置計画の立案者は商工省の官僚として戦前の産業合理化運動を進めた吉野信次（後の商工大臣）だった。

吉野によれば、工芸指導所開設以前から、農商務省による「我国有の工芸品の優秀な品を陳列して輸出を奨励したいという趣旨」の展覧会「農商務省図案及応用作品展」が開催されていたが、効果があがらなかった。そのため、吉野が商工省公務局の課長時代に、「我国有の伝統の工芸技術を育てて、指導して之に新しい時代の衣をさせる施設」として国の指導機関である工芸指導所を設けることにしたという（註<sup>1</sup>）。

つまり、日本の伝統的工芸技術の近代化とその輸出の振興を図ることが、工芸指導所の使命であった。設置場所は、最初の案では東京だったが、予算獲得のため政治問題となっていた東北振興に便乗し、仙台に開設されることになる。

仙台市の工芸指導所の跡地には、現在、「工藝発祥」の文字と記念碑、プレートが残されており（図版<sup>1</sup>）、そのプレートには以下のように記されている。

明治以来ひたすら西欧追従に急な時流のなかで、優れたわが国伝統の工芸に着目し、その近代化をはかり輸出を振興するため、さらには東北の産業開発の一翼をになつて昭和三年国立工芸指導所はこの地に創設された。

工芸指導所は工芸を産業の技術として高め、わが国産業工芸の基盤をつくつた。また「見る工芸から使う工芸へ」の指導理念のもとにドイツの建築家ブルーノ・タウトを招き機能実験、規範原形の研究を行うなど、近代デザイン運動を世に先駆けて実践した。まさに近代工芸及びデザイン研究の発祥の地であることを思い、之を記念し、心あるもの相寄りこの碑を建てる。

昭和四十五年初夏（註<sup>2</sup>）

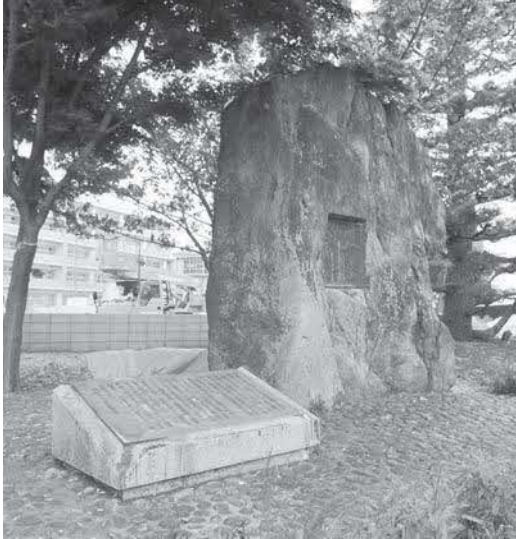
こうして開設された工芸指導所は、当初、第一部（木・漆工）、第二部（金工）、第三部（図案）および庶務課という体制の小さな組織であった。

今考えてみても国立としては実に微々たる規模で、技師は所長以下専任三名、兼任二名、技手四名、属一名、嘱託、助手、工長、工手を加えて二十数名の小人員で、初年度の建設費と経常費を加

えても当時の金で三十万円もでなかった。

そして当時の工芸界は、この東北開拓使庁？に誰が行くかということ、仙台のような片田舎で何ができるかというような事ばかりな関心事であつたらしい（註<sup>3</sup>）。

この工芸指導所の創設時から技師として加わり、後に第二代の所長となるのが島根県出身の齋藤信治（図版<sup>2</sup>）である。齋藤は初代所長長国井喜太郎の後を受けて昭和十八年（一九四三）から昭和二十四年（一九四九）まで、約六年間所長を務めた。本稿では、これまで顧みられることほとんどなかった齋藤信治の工芸指導所での活動を中心に、昭和前半期の日本の産業工芸の振興政策について見てきたい。



図版 1 国立工芸指導所記念碑

#### 一 国立工芸指導所入所以前

齋藤信治は、明治二十五年（一八九二）、島根県松江市栄町に森山虎太郎の次男として生まれた。家は菓子製造業を営んでいた（註<sup>4</sup>（図版<sup>3</sup>））。明治四十三年（一九一〇）に島根県立松江中学校を卒業するが、この年は、やはり松江中学に学んだ陶芸家の河井寛次郎の卒業と同じ年である（註<sup>5</sup>）。

中学校卒業後、隠岐海士村の崎尋常小学校の代用教員となり、ここに訓導として勤めていた齋藤テイと知り合った（註<sup>6</sup>）。この女性との結婚で齋藤家の養子になるため、姓が森山から齋藤にかわることになる。

代用教員を務めた後、東京に出て東京高等工業学校の工業図案科に入学した。工業図案科には、当時、一学年十数名の学生が在籍していたが、同学年には「木のめ舎」の森谷延雄、一学年下には芹沢銈介（旧姓大石）がいる。また河井寛次郎も学科は違うが（河井は窯業科）、同校で学んでいる（註<sup>7</sup>）。

東京高等工業学校の工業図案科は、東京美術学校、京都高等工芸学校と並び図案科のある数少ない学校のひとつで、日本の高等デザイン教育の先駆的な学校であった。齋藤信治が在学していた大正元年（一九一二）から大正四年（一九一五）の間の、工業図案科の科長は洋画家として有名な松岡寿で、他に安田祿造、鹿島英二らが教授として教鞭を執った。

齋藤は後に、東京高等工業学校の工業図案科について、「今日の工業デザイン教育の在り方から見ても、明治の中期にこうした現実に即した制度を採用した創設者の先見の明には敬意を表せざるを得



図版2 斎藤信治



図版3 斎藤信治の実家

ない」と回想している。しかし、斎藤の在学中の大正三年（一九一四）、文部省は、工業図案科を廃止し、在校生は卒業まで東京美術学校に委託された。これは産業工芸にかかわる者に大きな衝撃を与えた事件だったが、斎藤は上野での学生生活を良い思い出として語っている（註8）。

工業図案科を卒業した斎藤は、日本紙器株式会社、富山県工業会および富山市立物産陳列館の技師、特許局審査官補などの職に就いた。斎藤テイとは、大正六年（一九一七）に結婚し、子供を六人もうけている（註9）。

## 二 ブルーノ・タウトと初期の工芸指導所

工芸指導所は、昭和三（一九二八）年十一月に開所式を挙行した。斎藤はすでにこの年の七月から技師として準備に携わり、当初、第三部（図案）の部長と調査係を兼掌した。第一部（木・漆工）の部長は高久栄一、第二部（金工）の部長は杉田精二（禾堂）であった。

斎藤信治は、後に工芸指導所の初期の主な事業として、「東北地方工芸産業の実態把握」「東北地方を対象とした研究指導事業」「東北工芸協会の創立」そして「全国工芸関係技術官会議」という四つの項目をあげているが、そのうち三つは東北地方を対象とした事業であることがわかる（註10）。

全国工芸関係技術官会議は、昭和五（一九三〇）年に第一回目が仙台の国立工芸指導所内で開催された。全国の道府県市の工芸技術官約六十名が集まり、商工省からは吉野信次工務局長以下関係官八名が参加した。そのうち工芸指導所からは、所長の国井、第一部長の高久、第三部長の斎藤が出席している（註11）。その後、毎年開催されることになったこの会議での決議は、政府の施策に大きな影響を及ぼして、昭和八年（一九三三）の工芸振興費の公布等となって会議の内容が具体化されるようになる。

つまり、指導所は初め主として東北地方の固有の手工芸を近代化する事業を行っていたが、全国工芸関係技術官会議などの働きかけによって、事業を拡大することになるのである（註12）。

こうした事業拡大への働きかけのなかで、国井所長は海外市場調査のため半年間、東南アジア、ヨーロッパ、アメリカを訪れた。帰国後は、日本全国を巡って日本の固有工芸の振興とその輸出の方策

について講演している。

また所長の帰国直後の昭和八年（一九三三）九月には、東京の三越本店で「工芸指導所研究試作品展」が開催された。これは、指導所の開所以来五年間の業績を中央で発表する最初の機会であり、指導所が力を入れた事業であった。会場を訪れ、指導所の作品を痛烈に批判したのが、日本に来ていたドイツの建築家のブルーノ・タウトであった。

日本橋の三越で商工省工芸指導所の展覧会を観た。さて質のよいものがあるだろうか、一寥々たるものだ、せいぜい二つか三つである。そのほかはいずれも間に合せのやつつけ仕事だ。ヨーロッパアメリカのスケッチ的模倣で『輸出趣味』に終始している。国井所長が私に腹藏のない意見を求めたので、遠慮なく批評した（註13）。

タウトの試作品展への来場は、入所当初から指導所の事業に疑問をもっていた剣持勇が、東京高等工芸学校の恩師を通じて依頼したとみられる（註14）。東京高等工芸学校を卒業した剣持が、齋藤の第三部（部長補は西川友武）の助手として入所したのは、試作品展開催の前年のことであった。

しかし工芸指導所でも、剣持の入所以前から、ドイツの動向は注目しており、齋藤は『工芸ニュース』に「外誌を通じて見た最近の独逸工芸」という記事を書いていた（註15）。それは、タウトも一員だったドイツ工作連盟や、パウハウスの活動を参考に日本の工芸が

改善されるべきという趣旨のものである。齋藤は工芸指導所の定期刊行物『工芸ニュース』の編集に携わり、紙面で国内外の新しいデザインの情報を紹介していたのである。

また、タウトの来日前に、工芸指導所はドイツ工作連盟についてのパンフレット『独逸ヴェルクブンドの成立とその精神』（註16）<sup>図4</sup>を出版している。これは、調査係であった齋藤信治のもと、鈴木道次が工作連盟について調べ、翻訳したものであった。このパンフレットの仕事がきっかけになって、鈴木も来日していたタウトに手紙で試作品展のことを伝えていた。

試作品展会場で、国井所長に対して、指導所の作品について否定的な評価を述べたタウトであったが、工芸指導所に昭和八年（一九三三）十一月から翌年三月までの期間、嘱託として招聘されることになる（<sup>図版5</sup>）。指導所に招かれたタウトは、指導所の事業について批判し、改善を要望する。通訳を務めた鈴木によれば、タウトは下記のような考えを持っていた。

足許の基盤のしっかりしない、いわゆる新しい輸出向工芸品を排して、もっと着実な伝統的態度そのままを体した、真の日本の優良品の作成を、新しい近代の品目について強く要望した。いわば世界致るところにおいて同じであり、同様に高く評価される工芸品を生み出し、選び出し得る正しい指導者教養の涵養に向けられていたのである（註17）。

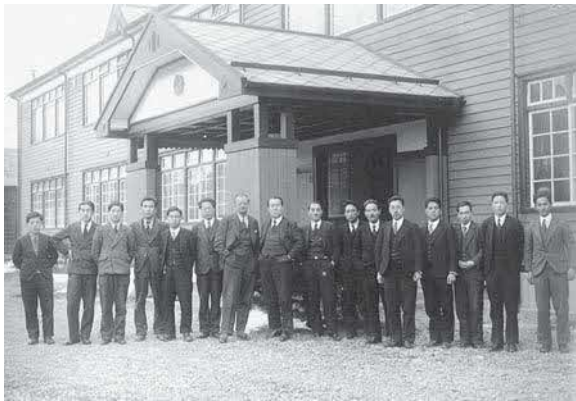
工芸指導所は、輸出振興を使命として創立された機関であり、そ

の上、歴史も浅く小さな組織だったことが、タウトのこうした批判、要望となる一因だったと考えられる。囑託となったタウトは自らの考えに沿って『プログラム』を提案(註18)、剣持ら若手所員とともに新しい近代的品目である椅子、ドアの把手、照明器具の「規範原型」の研究に取りかかった。

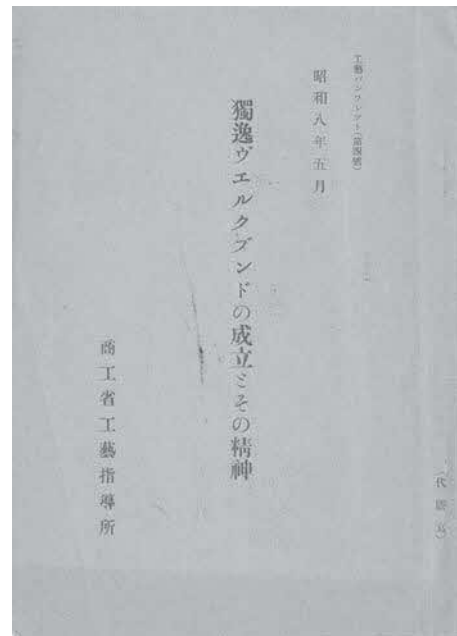
私の『プログラム』は昨日、約四十名の職員によって討議された、議長は斎藤氏。いろいろ質問が出た。しかし結局承認と賛成とを得たようだ。旅行から帰った国井氏も賛意を表した(註19)。

斎藤は国井所長の留守の際には、責任者としてタウトに対応したが、タウトと機能主義的な「規範原型」の研究を進めた剣持、鈴木ら若い所員たちとは立場が違い、苦労も多かったようである(註20)。タウトが工芸指導所に招かれた当時、斎藤は第二部長となっていた。またタウトに日本の伝統的工芸品の調査を依頼したのは調査係の斎藤である(註21)。

今日斎藤氏から、私が工芸指導所の囑託として京阪地方へ出張し、指導所に適切な工芸品を選択してほしいという話があった(見本用及び輸出品工芸品製作の参考に資するため)。斎藤氏は副所長格の人だがなかなか愉快な人柄だ(註22)。



図版5 工芸指導所と所員 中央にブルーノ・タウト(左から7番目)と所長の国井喜太郎(左から8番目)。斎藤信治は左から9番目。他に鈴木道次(左から1番目)、剣持勇(同2番目)、西川友武(同5番目)、豊口克平(同10番目)など所員が並ぶ。



図版4 『独逸ヴェルクブンドの成立とその精神』

## 三 欧米視察と工芸指導所関西支所

タウトが、工芸指導所を去った翌年、大阪府工芸協会主催の大阪府産業工芸博覧会が府立貿易館で開催された（図版6）。この展覧会は、「工芸品の工業化、工業品の工芸化」のスローガンのもとに、工芸品と工業品を一堂に展覧した日本で初めての博覧会であった。また公の事業に「産業工芸」という言葉が用いられたのも、これが初めてであった。

博覧会の開催にあたっては、工芸指導所から転出した杉田精二が深く関わっていた。杉田は、大阪府工業奨励館内に設置された大阪府工芸産業奨励部の初代部長となり、工業品美化運動に力を注いでいた。産業工芸博覧会は、この工業品美化を趣旨とした展覧会であった。一方で杉田は、日展の工芸部の審査員でもあり、前衛的な美術工芸家としても地位を築いていた人物である（註23）。

齋藤信治はこの博覧会を訪れ、会期中に開催された工芸座談会にも出席している（註24）。大阪がこうした工業品美化の運動に力を入れたのは、工芸指導所関西支所の大阪への誘致という事情があった。杉田の大阪府工芸産業奨励部への転出にも同じ背景がある。齋藤はこの産業工芸博覧会に、違和感を持つていたこと、また工業品美化が「今日のグッド・デザインとは可なり隔たりのあ」ったことを後に回想している（註25）。

工芸指導所の事業拡充のための官制改正の勅令が公布されたのは、昭和十二年（一九三七）であった。その内容は、東京に本所を新設し、仙台の指導所も拡大、加えて関西支所を設置することによって全国指導の体制を確立するものである。また業務の対象も「木工品

および金工品」から「工芸全般」に拡大され、量産工業品も本格的な研究、指導の対象になってくる。

こうした時（一九三七年十一月から翌年七月まで）、齋藤信治は欧米に派遣された。指導所の職員としては、国井所長、第三代工芸指導所長になる松崎副三郎に続いての派遣である。

齋藤が現地から送った視察の様子は、『工芸ニュース』に報告記事として八回に渡って掲載された。この記事はほぼ同時期に欧米に派遣された杉田との共著『欧米の新工芸』としてまとめられ出版される（註26）（図版7）。美術工芸の制作者であった杉田に比べ、齋藤の記事はその国の工芸振興制度、組織にも詳しく触れ、分量も多い。以下、齋藤の訪れた主な国であるフランス、ドイツ、オーストリア、イギリス、アメリカについての記事を簡単に見ていく。

まず最初に詳しく報告した国フランスからは、齋藤は下記のような感想と反省を、日本に書き送っている。これは「工芸ニュース」の編集に携わり、外国の雑誌や本から工芸の情報を紹介していた齋藤ならではの反省であろう。

日本の最近の工芸が特に産業的な方面の工芸界が外国雑誌や本や旅行者の印象記などから、上すべりな感激と模倣に終始して居るかに比して仏蘭西の工芸が堂々として一步一步大地に足を踏みしめて、最も近い独逸や英国の影響を少しも現はして居ない、否影響されて居るであろうが生地の儘現はして居ない立派な態度を見まして、之はお互に日本の工芸関係者は落ち付いて考へなくてはならぬ安直な感激や模倣をして居られぬ、何処へ出しても通用

する日本の工芸品を出す準備をせねばならぬと云うやうな考へが勃然として起つて来ましたので、容易に印象的な報告をかく気持ちがおこらず、出来る丈深く探り度い（註27）。

ドイツは当時ナチスが政権を握っていた。ナチスの政策は絶大な強制力をもっており産業振興策においてもその力を發揮していたことが報告されている。日本でも国家総動員法が施行される直前で、工業、工芸の指導統制事業に参考となる点が多いという観点から、その政策が詳しく調査された。しかし斎藤も、その行き過ぎた統制には疑問を持っていたようである。

「形に現れた行為は之を取り締るのは易いが、眼に見えざる思想を取締ることは頗る困難なことであらう、文芸、芸術は自由なるところに発達があるのではないか。」（中略）私は事業成績の成否を検討する違がない。只其の組織的な体系と、行き届いた事務の遂行振りを、他山の石として見た丈である（註28）。

オーストリアはナチスドイツに併合される直前で、ウィーン工房（維納工芸協会）も解散し昔日の面影はなかつた。報告の分量も少ないが、そこには斎藤の個人的な感想が最もよく表されている。斎藤の通っていた東京高等工業学校の工業図案科はウィーンの工芸とかわりが深く、斎藤はウィーン留学から帰国したばかりの安田禄造に学んでいたのだった（註29）。

私が維納を訪ねる唯一の楽しみは、維納工芸協会の活動を観、又学生時代からひそかに其の名声に憧れていたホフマン教授の警咳に接せむとするにあった。（中略）幸い同協会の会員である上野夫人リーチ氏が在壇せられ、同夫人の盡力にてホフマン教授に二回面会し、又工芸学校の各教室を参観し、各主任教授の指導振り、生徒の作品を見、又数氏の会員に面接し、其れ等の人々のアトリエの製作と維納市内の著名な商店に於ける製品との関係も实地に視察することを得たので、僅か四五日の滞在ではあつたが、予ての希望を達し、又将来吾々の任務を遂行する上に資料となる若干の事物をも見直すことを得たことをひそかに喜んでゐる次第である（註30）。

イギリスについての報告では、「英国に於ける工芸の奨励施設」という項目を設け、工芸にかかわるいくつかの組織について触れている（註31）。そして日本の工芸行政は、イギリスの政策が手本だったことを後年下記のように述べた。

当時我国商工行政、特に工芸行政は英国の保護行政に範をとつていたらしく、私も後年英国で工芸事情を調査した時、愈々その感を深くした。兎に角日本政府の工業品美化に対する政策のお手本が多分に英国の工芸産業奨励政策と施設にあつたことは事実と  
思う（註32）。

アメリカについては、その視察の目標を「日本工芸商品の市場的価値の打診」に置いていた。日本にとってアメリカは、最大の貿易

相手国でありその市場の大きさに期待していたが、後の太平洋戦争開戦によって工芸品輸出の道は絶たれることになる。また齋藤は、アメリカの電気器具類が非常に発達していることを報告し、今後、商品としての工芸の意匠設計、生産技術についてアメリカに学ぶことが多くなるだろうと予測している（註33）。工芸指導所は戦前からアメリカのインダストリアル・デザインに注目していたが（註34）、日本がその圧倒的な影響を受けるのは戦後になってからであった。齋藤は欧米視察から戻った翌年の昭和十四年（一九三九）に、新しく開設した関西支所の支所長に就任した。関西支所は大阪府の工業奨励館内に設置され、その主な目的は、輸出雑貨の高級化と工業品の美化であった。具体的には、ガラス、セルロイド、プラスチック、鍍金等の輸出雑貨のデザイン研究と輸出市場の実態調査、金型工作の研究などが考えられていたようである。

当初から、大阪の工業品美化運動を見守り、欧米の工芸状況を視察し帰国したばかりの齋藤は、関西支所長に適任だったと思われる。しかし、計画されていたこうした業務は、日中戦争の激化によって、次第に代用品の研究、生活用品の戦時規格の研究等にとって代わられるようになる。こうした中、齋藤は昭和十六年（一九四一）十二月の太平洋戦争開戦の月に、企画部長として東京本所に移ることになる。



図版7 『欧米の新工芸』



図版6 大阪府産業工芸博覧會ポスター



## 四 戦時下の工芸指導所長時代

昭和十五年（一九四〇）七月七日、政府は輸出入品等臨時措置法に基づく奢侈品等製造販売制限規則を施行した。いわゆる「七・七禁令」と呼ばれたこの規則は、工芸産業に打撃を与え、さらに翌年の物資統制令とともに工芸産業を存亡の危機に陥れた。工芸指導所の西川友武は、商工省物価局に兼務で出向し、伝統的工芸技術を保存するため工芸品制作の例外許可を設ける業務にあたった。また、それまでの主要な工芸団体が吸収されて誕生した大日本工芸会（後に日本美術及工芸協会に改組）が設立される際にも西川は尽力している。大日本工芸会の会長には吉野信次、理事長には工芸指導所長国井喜太郎が就任する（註<sup>35</sup>）。

昭和十八年（一九四三）、大日本工芸会のために国井が退官したことにより、齋藤信治が第二代工芸指導所長になった。齋藤によれば、後の日本美術及工芸協会（いわゆる「美統」）の設立後の工芸指導所の大きな課題は、「美統」による「技術保存の恩典に漏れた大多数の産業工芸業者の時局産業への転換に対する良き相談相手、良きパイロットとしての仕事に専念することであった。」という（註<sup>36</sup>）。

同年六月に戦力増強企業整備要綱により企業が軍需生産に重点的に配置されるようになり、工芸指導所は七月に陸海軍の航空機、兵器、被服等の生産に関係する軍人や、他の工芸指導機関、業界統制団体の関係者を呼んで「軍需産業に於ける工芸技術の活用に関する座談会」を所内で開催する（註<sup>37</sup>）。つまり工芸指導所は、美統による保存の対象となる伝統的工芸技術を持たないような製造業者を軍

需品生産に携わらせる指導を行うのであった。例えば、漆業者を爆弾や砲弾の塗装に転業させ、木工業者を木製軍用品の製作にあたらせた。

こうした軍需品生産に関する研究と指導は、当時政府部内にあつた工芸指導所や陶磁器試験所等の戦時の産業にかかわりの少ない試験研究機関を縮小、廃止しようとする意見に対抗するためのもので、特に軍用航空機の木製化に関する研究は工芸指導所の重要な業務になった（註<sup>38</sup>）。昭和十九年（一九四四）に木工業者を集めて開催した「機体部品木製化促進協議会」で、齋藤所長は次のように挨拶している。

「一機でも多く一時も早く、之が今日前線の叫びであり、国家の要請である。航空機の増産ということは国民全体の合言葉になった。いや言葉だけではなく国民の総力を結集して、今直に之を実現しなければならぬ喫緊の要務である。

吾々木工関係者も父祖伝来の特技をひっさげ、此の際決然立つて此の要請に応えねばならぬ。此の事は申す迄もなく、夙に各位が深く心に期して居られるところであり、又既にその一部に於かれては日夜増産に戦って居られるのであるが、吾国木工界の全体から言へば動員せられたものは未だ其一部に過ぎない。残りの大部分の者は、日夜名誉の応召を待ちわびて居たといふのが実状である。

処が、此の待ちに待った召集令状が全国の木工業者に達せられたのである。即ち一月七日、〇〇飛行機株式会社に於て航空総局

長官閣下臨席、整備部長閣下統裁のもとに、機体部品木製化促進打合会が開催せられ、その席上全国飛行機製作会社は夫々指定せられたる機種について機体部品の木製化を命ぜられ、之が実行に当たっては当所の推薦した木工業者を協力工場とし、急速なる実施を図るべきことを厳肅に指示せられた。之は明かに全国木工業者に対する召集令状である（註39）（図版8）。

戦時下では、こうした軍需品に関する研究と指導と共に、戦時規格による国民のための日常生活用具の研究と指導も行った。これまでも工芸指導所は、国民生活用品展（図版9）を開催するなど、生活用具の規格単純化の研究を行っていたが、齋藤の所長就任後、所内にその研究指導係を置き、本格的に戦時規格の業務に取りかかった。齋藤所長は、戦時という状況で、生産力を出来るだけ軍需に向けるため、これまでよりも「さらに厳格なものと切りつめた戦時規格に改め」、生活用具の生産と消費を規正すべきことを述べている（註40）。

この戦時規格では、必要不可欠な品目のみを、最も効率的で合理的な規格で生産することが目指された。それは、最小限の資材、労力、設備、輸送力によって、安価な製品を必要量だけ速やかに作り、配給することである（註41）。このことは、軍需のためということに加えて、資材の入手難による粗製品で国民の生活が貧しくなり、またメーカーの技術力も低下するのを、規格の研究とメーカーへの指導により是正するという側面もあった。

昭和十八年（一九四三）に、戦時生活必需品として、都市生活の

ためのものが百四十一品目、農村生活のためのものが百二十二品目選定された。工芸指導所は、これらのうちから家具七品目、漆器八品目、桶類四品目、和雑貨十二品目、玩具三品目の三十四品目の規格について、材料の処理、製品の構造、意匠、仕上及び検査基準等の研究とメーカーへの指導をすることになる（註42）。

こうした業務以外には、日本が、朝鮮、台湾、満州を始め、中国、東南アジア方面に進出したことにより、それぞれの地方の工芸品についての工芸調査や指導が行われている。これらの地方の未開発で豊富な資材や伝統的な技術とその意匠は「東洋趣味」と呼ばれて、注目されたのだった（図版10-1、10-2）。齋藤も関西支所長時代に、朝鮮に工芸指導のために出張している。また齋藤が所長に就任した際の事務分掌をみると「支那及南方工芸に関する調査研究」の係長は齋藤信治となっており、その責任者であったことがわかる（註43）。齋藤は後に、こうした調査研究が「比較的無味乾燥な戦時工芸の吾々の仕事に唯一の潤と慰安を与えた。」と振り返っている（註44）。

戦争末期、アメリカ軍による空襲で、昭和二十年（一九四五）三月に工芸指導所関西支所が全焼、四月には東京本所が全焼する。東北支所が残されたため焼け残った資料、機械を仙台に輸送したが、七月の仙台の空襲によってこれも駅構内で焼失してしまい、八月に終戦を迎える。

戦後も齋藤信治は引き続き所長を務め、工芸指導所の再建に尽力した。この時期に工芸指導所の業務として大きかったのは、進駐軍の家族住宅二万戸に付属する家具約九十五万点の設計と生産指導だった。設計は、昭和二十一年（一九四六）四月から六月までの約三ヶ

月間で三十品種についておこなわれ、全国の家具業者によって、第一次（一九四六年五月から翌年二月まで）、第二次（一九四七年十一月から翌年三月まで）、第三次（一九四八年十月から翌年三月まで）の三回の生産計画によって完成された（註45）。斎藤は生産にあたって、その意義について、次のように述べている。

戦時中吾国の木工業は航空機部品の木製化といふ新しい仕事に於て、厳格な規格生産への洗礼を受けたが、充分な訓練の機会を持たぬ内に敗戦と共にこの仕事は中断した。勤とコツを特徴として来た日本の工芸生産に一定規格による大量生産の方式と技術を教へた軍需品生産の知識と経験は、今後日本工芸が国際性を持つて発展して行く上に於て当然成長せしめるやう訓練せねばならぬものと思ふ。此の意味に於て極めて短期間に非常に膨大な数量をこなして行かねばならぬ今度の仕事は此の訓練に絶好の機会といはねばならぬ。（註46）（図版11-1、11-2）

進駐軍の家族用住宅の家具の生産が終了した年、昭和二十四年（一九四九）年六月に斎藤は工芸指導所を退官した。



図版10-2 「南方飲食用工芸品展示に就いて」『工芸ニュース』第12巻第1号、商工省工芸指導所、1943年2月



図版10-1 「航空機部品製作工場見学記録」『工芸指導』第13巻第6号、農商省工芸指導所、1944年8月



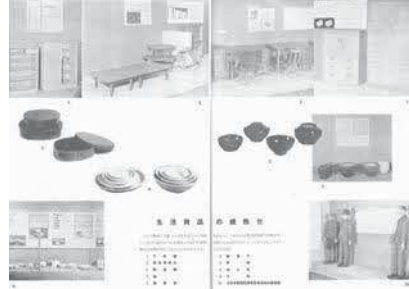
図版8 「航空機部品製作工場見学記録」『工芸指導』第13巻第6号、農商省工芸指導所、1944年8月



図版11-2 「進駐軍家族用家具生産の意義」『工芸ニュース』第14巻第2号、商工省工芸指導所、1946年10月



図版11-1 「第二回国民生活用品展開かる」『工芸ニュース』第12巻第4号、商工省工芸指導所、1943年5月



図版9 「第二回国民生活用品展開かる」『工芸ニュース』第12巻第4号、商工省工芸指導所、1943年5月

おわりに

退官にあたっての挨拶で述べているように、齋藤は産業工芸の研究と指導一筋の人生を送った（註47）。

東京高等工業学校工業図案科で最新のデザイン教育を受け、工芸指導所入所以前から産業工芸の仕事に携わった。工芸指導所では、創立当初からの幹部として大きな役割を果たし、また国内外の工芸を調査し担当した『工芸ニュース』等で新しい工芸デザインの普及に努めた。工芸指導所の顧問となったブルーノ・タウトに対しては、留守がちな所長の代わりに責任者として対応、伝統的工芸品の調査も依頼していた。

その後、産業工芸の指導者として期待され派遣された海外視察では、日本の産業工芸に有益な知見となるドイツの産業統制、アメリカのインダストリアル・デザイン等を実見し、帰国後は新設された大阪支所の支所長を務めた。

所長時代は、戦中戦後という困難な時期であったが、日本の工芸産業のために尽力した。「美統」が伝統工芸技術の保存の仕事を担当し、また戦争により欧米向けの輸出工芸品の研究も出来なくなったこの時期の工芸指導所は、量産規格の研究に集中し、機能主義的デザインを実践する。齋藤の所長時代に実施された「航空機部品の木製化」「日常生活用具の戦時規格」そして「進駐軍家族用住宅の家具生産」といった量産規格の研究と実践は日本のデザイン界にとって大きな経験となる。

齋藤は工業指導所を退官後、愛知県に招かれ昭和二十五年（一九五〇）から愛知県工業指導所長に就任、また愛知県工業設計家協会

（現中部デザイン協会）を創設し理事長となった。昭和三十一年（一九五六）には中部デザイン研究所を設立、昭和三十九年（一九六四）に名古屋で亡くなった。まさにその晩年までデザインの振興に努めた人生だった（註48）。

本稿では、齋藤信治が、国の指導機関の中心人物として、日本の産業工芸の発展に尽力したその仕事の一端を紹介した。現在では、ブルーノ・タウトや、工芸指導所の下の世代のデザイナー・豊口克平や剣持勇、また初代所長の国井喜太郎に比べ触れられる機会が少ないが、齋藤の仕事や発言を詳しく検討することは、戦前からの日本の産業工芸の進展を考える上で新たな視点をもたらすのではないだろうか。



図版12 齋藤信治が松江で描いた色紙「故山春耐 のぶ」（註49）

註

- 1 吉野信次「アルミニウムの額縁」『叢書・近代日本のデザイン』第二九巻「産業工芸試験所三十年史」工業技術院産業工芸試験所『ゆまに書房、二〇一〇年。
- 2 庄子晃子「国立工芸指導所について」『平成十五年度研究会報告書 Design Museum Project』宮城県産業デザイン交流協議会。
- 3 齋藤信治「初期の工芸指導所の事業」『デザイン』第三一号、美術出版社、一九六二年四月。
- 4 松江市在住の森山絹恵さんに森山家の戸籍を拝見させていただき、ご教示いただいた。図版2、3も森山さん所蔵の写真。
- 5 『松江北高等学校百年史』島根県立松江北高等学校、一九七六年。
- 6 『島根県学事関係職員録』島根県教育会、一九一一年。
- 7 『東京高等工業学校一覽』東京高等工業学校、一九一四年。
- 8 「大正三年九月新学期から、工業図案科は松岡科長以下、専任教官及三、二、一年の学生約五十名全員、上野へ移転した。美校では建築科のいた新館の階上を割愛して迎えてくれた。墨田河畔から上野の森の中に移り、非常に厳格な校風の生活から万事自由放任の校風生活に一足飛に入った我々はかなりの影響を受けた。然し博物館や動物園に自由に通え、又美校の文庫にあった豊富な文献や参考品は、我々の勉学上大きなプラスであった。(中略)又当時の美校の学生とも教室において、或は運動場などで同じように学び且つ遊んだ若き日の思出は懐かしいものがある。」齋藤信治「東京高等工業学校工業図案科の思い出」『デザイン』第二八号、美術出版社、一九六二年一月。
- 9 齋藤信治は謡曲や尺八をたしなむ一方、子供の教育には厳しい父親だったようだ。家庭でのことなど、齋藤信治の息子の齋藤章氏にお話を伺った。
- 10 齋藤信治、前掲註3。
- 11 「全国工芸関係技術官会議録」『工芸指導』第一巻第三号、商工省工芸指導所、一九三〇年八月。この会議の経緯について齋藤は、石川県の工芸指導所の所長からの提案を商工省工芸指導所が取り上げ、本省に献策し成立したとしている。齋藤は部長としてこの会議に深く関わっていたことがわかる。前掲註3。
- 12 剣持勇「工芸指導所の初期の頃」『デザイン』第三一号、美術出版社、一九六二年四月。
- 13 ブルノ・タウト(篠田英雄訳)『日本 タウトの日記』I、岩波書店、一九五〇年、一六四頁、一九三三年九月五日(火)の記述。
- 14 森仁史「伝統と近代・架橋と狭間―剣持勇ノート」『ジャパニーズ・モダン 剣持勇とその世界』国書刊行会、二〇〇五年、及び森仁史「デザインへの指導―試作実験の展開」『叢書・近代日本のデザイン』第三〇巻「商工省工芸指導所研究試作品展覧会図録」商工省工芸指導所／「輸出向け工芸品図録」商工省工芸指導所／「日野厚氏講演 海外工芸近況」日野厚『ゆまに書房、二〇一〇年。
- 15 齋藤信治「外誌を通じて見た最近の独逸工芸」『工芸ニュース』第二巻第一号、商工省工芸指導所、一九三三年一月。
- 16 『工芸パンフレット』第四号 独逸ヴェルクプントの成立とその

- 精神』商工省工芸指導所、一九三三年五月
- 17 鈴木道次「タウト提案」についてのメモー指導所時代のブルーノ・タウト」『デザイン』第三二号、美術出版社、一九六二年四月。
- 18 タウトの『プログラム』は、「タウトの提案」として、「産業工芸試験所三十年史」（前掲註1）に掲載されている。タウトの工芸指導所の様々な提言については、庄子晃子「商工省工芸指導所に対するブルーノ・タウトの諸提言」『デザイン学研究』第四三巻第五号、日本デザイン学会、一九九七年一月。
- 19 ブルーノ・タウト（篠田英雄訳）『日本 タウトの日記』Ⅱ、岩波書店、一九五五年、三〇頁、一九三三年十一月二十五日（土）の記述。
- 20 「仙台本所に於ける 故ブルーノ・タウト氏を偲ぶ座談会」『工芸ニュース』第八巻第四号、商工省工芸指導所、一九三九年四月。
- 21 庄子晃子「ブルーノ・タウトの商工省工芸指導所のための優良工芸品の選定―出張先京都からの二通の手紙の翻訳を通しての検討」『デザイン学研究』第四五巻第一号（日本デザイン学会、一九九八年五月）に、ブルーノ・タウトが、齋藤信治にあてて書いた二通の手紙が翻訳され、掲載されている。
- 22 タウト、前掲註19、五八頁、一九三三年十二月十三日（水）の記述。
- 23 福岡縫太郎「工業品美化運動と大阪」『デザイン』第三九号、美術出版社、一九六二年一〇月
- 24 『大阪府産業工芸博覧会記念誌』社団法人大阪府工芸協会、一九三五年一月。
- 25 齋藤信治「工業品美化運動の背景」『デザイン』第三九号、美術出版社、一九六二年一〇月。齋藤の違和感は、「産業工芸」を「工芸美術」よりも格下と見なすことで、工芸美術家としての立場を保持しながら、産業工芸の振興を推し進めようとする意志を持つ杉田の見識が反映された展覧会の構造的な歪みを読み取ったためという指摘がある。木田拓也「実在工芸美術会一九三五―一九四〇…「用即美」の工芸」『研究紀要』東京国立近代美術館、二〇〇九年。
- 26 齋藤信治・杉田精二『欧米の新工芸』日本輸出工芸連合会、一九三九年。
- 27 齋藤信治「海外報告・第三信 仏蘭西の工芸」『工芸ニュース』第七巻第四号、商工省工芸指導所、一九三八年四月。
- 28 齋藤信治「海外工芸事情 第五信 独逸国に於ける手工業の奨励と其の統制に就いて」『工芸ニュース』第七巻第七号、商工省工芸指導所、一九三八年七月。
- 29 河野克彦「日本の近代デザインとウィーン」『ウィーン展 華麗なる美術と音楽のしらべ』図録（島根県立石見美術館、二〇〇六年）及び、河野克彦「安田祿造とウィーン―日本とオーストリアの工芸と図案について」『研究紀要』（島根県立石見美術館、二〇〇七年）。
- 30 齋藤信治「海外工芸事情 第六信 維納の工芸」『工芸ニュース』第七巻第八号、商工省工芸指導所、一九三八年八月。
- 31 齋藤信治「海外報告 第七信 海外工芸事情 英国の工芸」

- 『工芸ニュース』第七卷第九号、商工省工芸指導所、一九三八年九月。
- 32 齋藤信治、前掲註25。
- 33 齋藤信治「海外工芸事情 貿易局宛報告第八信 米国の工芸」『工芸ニュース』第八卷第一号、商工省工芸指導所、一九三九年一月。
- 34 河野克彦「一九三〇年代の日本が見たアメリカー国立工芸指導所の産業工芸とアメリカの工業デザイン」『アメリカの見た夢一九二〇―三〇年代の絵画、写真、デザインと日本』図録、島根県立石見美術館、二〇〇九年。
- 35 西川友武『美術及工芸技術の保存』工芸学会、一九六六年。
- 36 齋藤信治「工芸産業の転換と本所の再建」『工芸ニュース』第一七卷第二号、商工省工芸指導所、一九四八年二月。
- 37 「軍需産業に於ける工芸技術の活用に関する座談会・一」第一二卷七号（商工省工芸指導所、一九四三年九月）及び「軍需産業に於ける工芸技術の活用に関する座談会・二」第一二卷八号（商工省工芸指導所、一九四三年一〇月）。
- 38 『デザインの先覚者 国井喜太郎』国井喜太郎先生顕彰会、一九六九年、九二頁。
- 39 「一機でも多く一本所に於ける機体部品木製化促進協議会 席上所長挨拶要旨」『工芸指導』第一三卷第二号、農商省工芸指導所、一九四四年二月。
- 40 齋藤信治「決戦生活と生活用具の規格化」『工芸ニュース』第一二卷第六号、商工省工芸指導所、一九四三年八月。
- 41 こうした戦時規格は、ブルーノ・タウトが指導した機能主義的な規範原型の研究と発想は同じであるという指摘がある。森仁史『日本〈工芸〉の近代 美術とデザインの母体として』吉川弘文館、二〇〇九年。
- 42 齋藤信治「当所の近業（承前）」『工芸指導』第一二卷第九号、農商省工芸指導所、一九四三年一月。
- 43 「昭和十八年度本所研究項目決まる」『工芸ニュース』第一二卷第三号、商工省工芸指導所、一九四三年四月。
- 44 齋藤信治、前掲註36。
- 45 小泉和子、高数昭、内田青蔵『占領軍住宅の記録』上下二巻、住まいの図書館出版局、一九九九年。
- 46 齋藤信治「進駐軍家族用家具生産の意義」『工芸ニュース』第一四卷第二号、商工省工芸指導所、一九四六年一〇月。
- 47 齋藤信治「退任の御挨拶」『工芸ニュース』第一七卷第八号、一九四九年八月。
- 48 中部デザイン協会理事長の舟橋辰朗氏に、中部デザイン研究所に残る齋藤の資料を拝見させていただいた（図版4、7は中部デザイン研究所蔵の資料）。また舟橋氏による齋藤信治についての記事は、舟橋辰朗「CDA理事長のつれづれ 中部デザイン協会創立者・齋藤信治へその一」『中部デザイン協会メールマガジン』（中部デザイン協会、二〇一一年一月）、及び「CDA理事長のつれづれ 中部デザイン協会創立者・齋藤信治へその二」『中部デザイン協会メールマガジン』（中部デザイン協会、二〇一一年二月）。

49 松江市在住の漆芸家石村英一氏蔵の色紙。石村氏の父が齋藤と交友があった。

(当館主任学芸員)



島根県立石見美術館  
研究紀要 第5号

発行日－平成23年3月31日

編集発行－島根県立石見美術館

〒698-0022 益田市有明町5-15

TEL 0856-23-2050 FAX 0856-31-1878

印刷－株式会社タイピック